

があつて、其の分布も朝鮮、日本等に及んで居るのであるが、此の五體の書は未だ曾て印行せられたことはなく、奉天宮殿のもの以外には、ブリチッシュミュージアムに一部あるといふことを聞いて居る外は、その存在を耳にしないのである、これから考がへて見ると、此の書の編纂は四體よりも更に後れ、恐らくは乾隆の極めて末年、或は天子の崩御に近い頃で、爲に刊行もせられず、序文も付け加へられるに至らなかつたものであらうと思ふ。五體といふのは前の四體に回語即ち清領土耳其語、所謂チャガタイ語を加へたからの稱呼で、此の書に及んで清の領地の重なる國語は、一わたり對譯せられ終つたのである。

此の書は卷頭の寫眞に見えて居る様に第一段に滿洲語、第二段に西藏語、第三段に其の西藏語の文字の發音を滿洲字で書き、第四段には同じ語の發音を滿洲字で書き、第五段には蒙古語、第六段には土耳其語、第七段には其の土耳其語の發音を滿洲字にて書き、第八段に漢語を配して居る、即ち四體清文鑑と比すると、西藏語に文字と語との發音を附したと、土耳其語を増し、また其の發音を示して居ることゝが變つて居るのである、西藏の文字は滿洲字とは全く別で、而して其の言葉は文字通りには發音しないのだから、かく文字と言葉との兩様の發音を記載する必要があつたのである。

本書も正篇三十二卷、補篇四卷より成つて、每卷一冊に別れて居るから、冊數にして三十六冊になつて居る、文字の記された頁數が全體で五千二百六十六頁、毎頁に各四語宛を載せてあるから、語數は總計は各二萬餘語を收めてある譯である、尤も此の二萬餘語が全く相異つた言葉といふのではない、假令ば黒といふ語があり、茶といふ言葉があつて、他の所にはまた黒茶なる語が出て居るといふ風に、一つ一つの語としては尙ほ少くなるけれども、